

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<研究動向>ソ連歴史学のペレストロイカ

著者	倉持 俊一
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	40
ページ	159-165
発行年	1988-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10317

ソ連歴史学のペレストロイカ

私は第八回日ソ歴史学シンポジウムに出席するため、一九八七年六月のはじめ、二週間ソ連を訪れた。

このシンポジウムは奇数回が日本で、偶数回はソ連で開かれてきたが、私は毎回訪ソし、そのうち第四回と第六回のシンポジウムについては、その報告を『法政史学』に書いてきた。今回も執筆の機会を与えられたが、今度は三回目にもなり一区切りついた感じもあるので、小文の末尾に第一回以来のテーマと全報告者、紹介、批判などの関連文献を整理して、第一回から関わってきた事務担当者としての責任をはたすことを主眼としたい。

一

今回のシンポジウムの内容については、帰国直後に、同

ソ連歴史学のペレストロイカ（倉持）

倉持 俊 一

行した加納格氏と共同ですでに書いて⁽¹⁾いる。また、そのほかにも優れた紹介・分析が多いので、全体としての最近のソ連史学界の動向を簡単に紹介するにとどめたい。

註(1)の小文のなかで私は「今回のシンポジウムは、一口でいえば、従来のシンポジウムより、はるかに実り多く、われわれにソ連の歴史学界のペレストロイカ（再建・改革）の進行を痛感させるものであった」と書いた。

現在では、日本でもペレストロイカは、新聞やテレビに毎日のように登場するかなり知られた語となっているが、帰国後、六月二〇日に法政史学会の講演でペレストロイカという言葉を使ったときには、知らない聞き手がほとんどであった。また引用文のなかの「（再建・改革）」は、ペレストロイカは、歴史家にとってさえ、まだ未知の語である

からという編集部の要請によって挿入されたものである。

最近のソ連史学界の動向といえ、結局、歴史学のペロストロイカの進行ということになるが、これについてもすでに優れた著作が多く発表されている⁽³⁾。従って屋上屋を架すといった感が深い、専門外の読者、とくに本誌の性格上、日本史専攻者を念頭において、私なりの解説を試みたい。

二

ゴルバチョフ政権が成立したのは一九八五年三月である。一八年間にわたるブレジネフの長期政権——ソ連に沈滞をもたらしたと目下批判的となっている——が、彼の死によって幕をとじたあと、アンドロポフ、チエルネンコが相ついで政権を担当するが、二人とも一年余で死去した。この二人が六八歳、七三歳でその地位についたのに対して、ゴルバチョフは五四歳になったばかりで最高指導者となったのであり、久しぶりの若いリーダーとして国の内外の関心をあつめた。就任直後から党と政府首脳の人事異動を行ない、長い沈滞をうちやぶるべく、政治・経済・外交などのペロストロイカに着手したのであった。

そしてやがて、一九八六年末〜八七年初頭から、歴史学

界における本格的なペロストロイカが喧伝されるようになってきた。具体的には、ロシア史、とくに一九一七年のロシア革命後のソ連史の再検討である。

一九八七年二月、マスコミ幹部との会合で、ゴルバチョフは「わが国の歴史に、忘れられた名前や空白の部分があつてはならない」と語り、これが従来のタブーに対する長い沈黙をやぶりはじめていた歴史家を勇気づけたのである。「空白の部分」の代表的なものはスターリンによる大量弾圧、「大粛清」、多大の犠牲をともなった農業集団化（コルホーズ化）などであり、「忘れられた名前」とは、G・E・ジノーヴィエフ、L・B・カメネフであり、N・I・ブハーリン、L・D・トロツキイなどである。

従来のソ連史学では、革命後、とくにスターリン時代以後のソ連の否定的側面を無視し糊塗する形で、現代史が叙述されてきた。革命後のソ連社会の発展を、優れた指導者のもと、種々の困難を克服し、敵対者を排除しつつ、「社会主義」の建設に向って誤りなく進んできたという一面的で平板な叙述である。

もちろん、それは主としてスターリンの威圧と、歴史家自身の自己規制の結果であり、またスターリン批判（一九五六年）の挫折の結果であった。そのためソ連史学界で

は、永い間、この現代史が、最も研究のおくれた水準の低い分野となつてしまつていたのである。

そして私がこの小文で強調したいことは、日本でも専門家の著作などを例外として、長くそのような叙述が踏襲され、スターリン批判後も狭義の肅清の問題をのぞいて、その基調は變つていなかったということである（このことの原因の究明自体が興味あるテーマになると思うが、ここではふれない）。従つてソ連史のペレストロイカは、日本の歴史家に直接関係する問題でもあると思う。

三

私は六年ほどまえに、ロシアソ連史を専攻しているわれわれと、それ以外の分野の歴史家との間で、革命後のソ連史の認識に大きなギャップがあることを指摘した。⁽⁴⁾

そのとき、例の一つとしてあげたのは次のことであつた。その分野では著名な出版社が出している高校生向きの世界史史料集（初版一九六九年で七五年まで増刷）の改訂の相談をうけたときのことである。その史料集のロシア近代史・ソ連史に関する項目は七つで、その見出しと内容は次のとおりであつた。

ロシアの農奴解放（解放令）

ソ連歴史学のペレストロイカ（肩持）

ロシアの近代化（ナロードニキの綱領）

ロシア革命（レーニンの「四月テーゼ」）

ソヴェエト連邦の発展（第一次と第二次の五カ年計画に関する党大会の決議）

現代のソ連邦（一九三六年のスターリン憲法）

冷たい戦争（一九五五年のワルシャワ条約）

日ソの国交回復（一九五六年の日ソ共同宣言）

（そのほかに、レーニンの帝国主義論、テヘラン会談に

ついでに項目がある）

もちろん極めて限られたスペースのことではあるが、革命からスターリンの死（一九五三年）までの現代史について、五カ年計画とスターリン憲法だけが——しかも全面的に肯定的なものとして——とりあげられているのに驚かされたのである。それは、スターリン批判から一〇年以上もたつていた当時のわれわれのスターリン時代史の認識とは、かなり掛け離れたものだったのである。

また、これも五年ほどまえ、当時、高校で使用されていた世界史教科書（全部で一七種）のロシアソ連に関する叙述を検討したことがあるが、当時のメモを読みかえしてみると「大肅清」と農業集団化とは、記述と評価にかなりの隔たりがあることがわかつた。⁽⁵⁾

前者については、一九八七年一月二日、革命七〇周年を記念する集会で、ゴルバチョフが「スターリンの粛清は決して許せない」と厳しく批判したことを引くまでもなく、スターリンの権力慾と猜疑心によって被告とされた人々の「罪状」が捏造されたものであることは、わが国でも、すでに以前から周知のことであつたといえるであらう。

そのためか、粛清については一四冊の教科書が言及していたが——もちろん否定的事件として——、農業集団化については、問題点を指摘した程度のものをふくめても、わずかに五冊がふれているだけだつた。そもそも農業集団化は五カ年計画と表裏一体をなすものであるが、上からの権力による強制的集団化が、いかに大量弾圧、悲惨な結果をもたらしたかということは、ソ連以外の各国のソ連史研究者が、そろって早くから指摘していたところである。

ところで、その五冊の記述は次のとおりである。「農業では……集団化、機械化を強行するもので、国民は耐乏生活を強いられた」(第一学習社)、「国民の消費生活はかなり犠牲にされた」(学校図書)、「資本主義列強の包囲化で強行された建設には無理がともなつた。工業化に必要な資本は民衆の生活を犠牲にしてまかなうはかなかつたため、民衆の苦痛は深刻となつた」(三省堂)、「急激な工業化や農

業集団化に対する不満があらわれたと……」(実教出版)、「農村に対しては……集団化と機械化につとめた。そのため民衆の生活は非常に苦しかったが、国民はよく窮乏にたえ、五カ年計画は成功した」(帝国書院)。批判のトーンがそれほど強いものではないことがわかるであらう。

ペレストロイカの旗手アンバルツォフが、昨年のシンポジウムの席で農業集団化を批判した部分を、そのまま逐語的に記せば、次のとおりである。「三〇年代の政策は形式的な目標の達成を目的としていた。そのために生産者の利益は犠牲とされた。二〇年代にはじまつた工業化が三〇年代をふくめて、かなりの成果をあげたことは否定できない。しかしその代償は何だつたのか。それは犯罪としかいえないような代償をとまうものだった。強引に(農業)集団化政策を進めた結果、大衆的な飢餓が生じ、数百万の人が餓死したという一つの事実を思いおこすだけで十分である。」

このアンバルツォフの批判の内容そのものは、さきにふれたように、すでに日本や欧米の研究者の常識になつていたのである。それにもかかわらず、加納氏が註(一)の文で書いているとおり、われわれにとって「……しかし、ソ連の研究者の口からこうしたスターリン批判、三〇年代評

価を聞く時、……一種の感動を覚えずにはいられなかった」のである。とくに外国人であるわれわれを前にして、それが語られたのであるから、私などもすっかり興奮してしまったわけである。

以上、ソ連史学のペレストロイカが、われわれの歴史家としての仕事に、直接関係があるということについてのべた。しかし、もちろん問題はそれにとどまるものではない。われわれが忘れてはならないことは、現在のわが国にも、過去の——それもとくに現代史についての——否定的な史実や側面を過小評価したり、隠蔽しようという考えが、為政者の側に根強く存在するという事実である。

四

与えられた紙幅をこえているが、次に「忘れられた名前」についてごく簡単に記しておこう。

スターリン時代には、スターリンにとって好ましくない人物、彼のライバルと考えられる人物は抹殺され、その存在は過去に遡及して全面的にマイナスであったと叙述された。レーニン在世中（一九二四年まで）には、個々の誤りや失敗があったにしても、レーニンによって彼らが新政権のなかで重用されていたにもかかわらず。そしてスターリ

ン批判以後も、スターリン批判の充分な展開がおさえられたために、そのままの評価がソ連の歴史書のなかでいまだに横行しているのである。

さきに名前をあげた四人のうち、トロツキイはスターリンと対立して一九二六年に共産党を除名され、二九年に国外追放となり、ジノヴィエフとカメネフは一九三六年に、ブハーリンは一九三八年に肅清裁判で死刑の判決をうけ、三人とも処刑されている。以後、四人はソ連の歴史書の中ではマイナスの存在とされ、その名前が登場するときにはつねに革命の裏切り者、社会主義建設の妨害者としてであった。そして可能なかぎり、その存在自体が抹殺されたのである。

いま私の手もとに『大十月社会主義革命』（ロシア語）という本が三冊ある。これはロシア革命五〇周年、六〇周年、七〇周年を記念して、それぞれ一九六八年、七七年、八七年にモスクワで出版された十月革命に関する百科事典である。中国の百科事典における毛沢東の記述が、改訂ごとに短くなるとか、鄧小平の記述が増えるとかいうことがよく報道されるが、この三冊の百科事典では、四人の名は一九六八年版にも七七年版にも項目としては全く出てこない。そして昨年九月に刊行された一九八七年版で、四人と

も、はじめて項目として登場してきた。このことは当然注目すべきこととして日本の新聞にも紹介されたので、御存じの方も多いと思う。

記載されている内容はどうか。代表的なトロツキイについてみてみよう。彼は一九一七年の十月革命で決定的に重要な役割をはたしたといえるが、現在までのソ連の歴史書では、革命の過程でもマイナスの役割しかはたさなかったと述べられている（わが国でも、依然として、彼の役割をそのように判断する人がいる）。たとえばレーニンの指示に反して「武装蜂起」の日取りを引きのばして、革命の勝利を危うくしたという一方的な主張などで、この主張は、この八七年版でも繰り返されている。

また、首都ペトログラートにおける十月革命の主体は、ペトログラート市の労働者・兵士代表ソヴェトであり、このソヴェトが一〇月一六日に設置した軍事革命委員会である。そしてトロツキイは、九月二五日、正式に同ソヴェト幹部会議長となっており、ソヴェトと軍事革命委員会を代表する地位についていたのである。にもかかわらず、ソ連の革命史では、従来、この事実にあらずに叙述を進めていたのである。

一九八七年版の事典では、記述の分量はスターリンとは

ほ同じで、レーニンと理論的に対立したり、レーニンの政策に反対したことが指摘されているが、「一九〇五—〇七年の革命の参加者、ペテルブルク（ペトログラートの旧称）＝ソヴェト議長……（一九一七年七月、ボリシエビキ党に入党し）中央委員に選出。七月事件後、ブルジョア臨時政府によって逮捕。九月—十一月、ペトログラート＝ソヴェト議長」と記述されている。さらにレーニンとブレスト＝リトフスク講和をめぐって対立したこと、「一九二九年反ソ活動のためにソ連から追放され、国外で、全連邦共産党（ボリシエビキ）、ソ連およびコミンテルンに対する闘争に参加」したことなどが強調されているが、革命後のレーニン政権のもとで、党と政府の要職にあったことも、事実在即して述べられている。

この記述には、そのままトロツキイに対する正当な評価とはいえない部分があふくまされておき、全体としても問題があるとは思いますが、それにしてもペレストロイカのあらわれと考えることができるであろう。（一九八八年一月九日）

注

（一）『ペレストロイカ』の中のソ連歴史学——第八回日ソ歴史学シンポジウム』（『歴史学研究』五七二号、一九八七年

一〇月）

- (2) たとえば、和田春樹『私の見たベレストロイカ』（岩波新書、一九八七年一月）（冒頭の部分に今回のシンポジウムについての紹介・論評がある）、佐々木隆爾「第八回ソ連史学シンポジウムに参加して」（『科学と思想』六六号、一九八七年一〇月）など。
- (3) たとえば、和田春樹編『ベレストロイカを読む』（御茶の水書房、一九八七年九月）には歴史学界のベレストロイカを担う歴史家たちの代表的論文が的確な解説とともに翻訳されている。
- (4) 「ロシア革命の認識とその評価」（『講座・歴史教育 3 歴史教育の理論』、弘文堂、一九八二年七月）
- (5) 「日本人のロシア・ソ連認識——世界史教科書のなかのロシア革命」（倉持編『等身大のソ連』、有斐閣、一九八三年五月）
- (6) 現在の世界史教科書について、改めて検討すべきであったが、今回は時間の都合で果たせなかった。ただ内容的には、五年まえと比べて殆ど変化はないといえる。
- (7) 『朝日新聞』、一九八七年九月八日、同、九月二三日。